

史遊会通信

NO. 173
平成21年
2月14日
発行

事務局
☎
03--3712
0651
下山田方

一月講演

姫路城と千姫

島津隆子

城の変遷

JR姫路駅に降り立つと幅広い真っ直ぐな道路が延びている。その道を十五分ほど行くと、遙かな山上に聳える天守群と白鷺が舞い立つ姿そのままだ美しい姫路城が視界に入る。外堀・中堀・内堀が城を三重に取巻いていたその昔には、駅の辺りまで城域だったようだ。広さもさることながら、この城が日本一と讃えられる理由は三つある。一には城の構造がよく整い、均整がとれて、姿、形が美しいこと。
二に複雑な縄張りが巧みに打たれている。
三には他の城に比して天守・櫓・堀・濠望がよく現存しているため、わが国の城郭制

度を知る上で貴重な存在とされる。

古来より名古屋城・熊本城・姫路城が三名城といわれているが、熊本城は明治十年の西南戦争で、天守を焼失。名古屋城も昭和二十年に太平洋戦争で焼失した。その後復興したが、元の建築とは異なる。

姫路城も明治六年の「廃城令」の後、兵部省の所轄になり、三の丸一帯の櫓や屋敷が取り壊され、今は公園化されている。そして、他の城と同様、太平洋戦争時の空襲で被害を受けた。

しかし、昭和三十一年から八年かけて修理され、大天守一棟と小天守七棟が国宝。七十四棟が重要文化財、その他、国の特別

例会のお知らせ

◎ 2月例会

日時 平成21年2月25日(水)

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 太田精一氏

テーマ 15～16世紀の世界と日本

自由執筆は平山善之・中込勝則・

松川博光の諸氏。締切り 2月末

◎ 3月例会

日時 平成21年3月25日(水)

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 高橋由貴彦氏

テーマ 「マテオリッチの世界図を中心にして」

自由執筆は三戸岡道夫・瀧澤中・

島津隆子の諸氏。締切り 3月末

史跡に指定されている。平成五年にはユネスコの世界文化遺産に登録された。

姫路城を築いたのは正平元年（一三四六）赤松貞範による。応仁の乱後、織田信長より「中国方面軍司令官」に任じられた羽柴秀吉が対毛利勢の拠点にと修築した。

秀吉腹心の軍師として名高い黒田官兵衛孝高は当時、家老として姫路城を守っていた。その頃の播磨は西に毛利氏、東に織田氏の勢力が拮抗していて、どちらに靡くか意見の分かれる処だった。しかし、信長の将来性を信じて疑わない官兵衛の腹は決っていたのだ。

天正五年（一五七七）信長の命によって播磨に乗り込んできた秀吉に会った官兵衛は、秀吉に全面的な協力を約束した上で、姫路城の使用を申し出た。こうして姫路城は秀吉の播磨平定で軍事的に重要な役割を果たした。

その後、関ヶ原合戦（一六〇〇）での戦功により、徳川家康から池田輝政が姫路人城を命じられた。「西国の将軍」と謳われた輝政はその持てる権力と財力で城を大きく築き上げた。

城に使われた石と木材

姫路城を目の当たりにすると、この積み上げられた巨石が、どこからどのようにして集められ、城を形作ったのか、驚異を感じる。機械力も電力も無い時代のこと、大小の石は檜や榿材で造った轆や車に、太い鋼や鎖でくくり付けられて、動員された何千何百人の人力によって引かれたという。その石には関係した者たちの銘が、色々な形で刻まれているそうだ。

木材には松・杉・桧・榿・桜などが使われている。二本ある大天守の心柱のうち、東の長さ24・8m根元の直径97cmの樫材の方は、明暦二年（一六五六）、腐りかけた根元の心を削り抜き、枅材を詰めて根継をしたという。この接替え年号は解体工事の時、添柱の墨書によって解ったという。

城郭について

城郭は土木と建築から成る。土木は濠・土塁・石塁の工事で普請という。建築は櫓・門・堀・館・蔵の工事で作事という。

普請では縄を張って幾つかの区域に分けて濠・土塁・石塁・建物の位置を定める。これを縄張り・縄を引く、打つといい、区分した地域を曲輪という。この縄張りが堅固な城の決め手になるので、築城家・軍学

者たちは一に縄張り、二に普請に心を砕いたようだ。

普請は夫役として領民に課せられた。

白壁の特徴

今に誇る姫路城の美観は偏に真っ白な壁にある。建物のすべての壁は厚く塗られていて、柱などの木目は見せずに、上から白漆喰で塗籠造りになっている。わが国城郭建築の新しい特色である。これは鉄砲の発達にもよるが、漆喰を白く塗ったのは景観をより優美にする目的があった。天守が軍事的なものから、城主の威厳を誇示する政治的な意義へと変ったのである。

秀吉と中国大返し

天正十年（一五八二）姫路城を出発した秀吉は備中攻めを開始。清水宗治の守る高松城に迫った。

そして、秀吉が得意とする調略を拒否した宗治に対して、官兵衛の意見を容れた秀吉は、水攻めの戦法に出た。

始まった水攻めの最中、六月三日夜半のことである。秀吉の許に「明智光秀謀叛により、本能寺にて信長殿生害」の報が届いた。その死を隠したまま、秀吉は安国寺恵瓊を呼び、講和に持ち込んだ。

主君の死の報にただ驚愕し、うろたえ、取り乱す秀吉を叱咤激励して「中国大返し」の芸当を打たせたのは、沈着な官兵衛の助言であつたと伝わる。

大坂城の人質となる幼な妻千姫

千姫は家康の三男秀忠と正室お江与との間に第一子として慶長二年（一五九七）に生まれた。生まれながらにして名門の出である。しかし、それは否応なく政略の持ち駒として政争の具に供される運命を意味する。

それを証明するように、千姫誕生の翌年死去した秀吉の遺命に従って、幼い千姫は秀吉の嫡子秀頼の許婚にされた。

やがて、七歳になった千姫は四歳年上の秀頼の許へ輿入れをする。このことは千姫が生涯を通して運命に翻弄される、ほんの前奏曲に過ぎない。

幼な妻千姫の夫秀頼の母淀殿と千姫の母お江与は、信長の妹お市の方が遺した三姉妹なので、淀殿は千姫の伯母に当る。

だが、豊臣と徳川の間の政略結婚である以上、血の繋がりは、かえって淀殿の千姫憎しの感情を増幅させたにちがいない。

元和元年（一六一五）五月七日から八日

にかけての大坂落城のドラマは壮絶だ。ゆえに千姫の大坂城脱出にも諸説がある。

実際には淀殿や大野治長らが謀り、秀頼の命乞いのため千姫を城外に出したという。

千姫の恋

大坂落城から三ヶ月後、二条城の千姫は江戸へ旅立つた。その道中、千姫は警護に当たっていた桑名城藩の美男藩士を見初めることになる。

相手は桑名城主本多忠政の嫡男二十一歳の忠刻であつた。

忠刻の母熊姫は信長から自刃させられた家康の長男信康の娘なので、忠刻は家康の曾孫に当る。と聞けば熊姫の意図が垣間見える政略の匂いがしないでもない。

だが、忠刻との結婚を強く望んだのは千姫といわれている。

自らの意志で一目惚れをした男性と結ばれることなど、至難の業だった時代のこと、まるで奇跡のように念願を叶えた千姫は、悲劇の脱出から一年後に忠刻と再婚する。

姫路城で幸せな日々

千姫の輿入れの翌年、義父忠政が桑名から姫路へ移封となり、忠刻夫妻も共に姫路城に移った。

この国替えの折、義父は二人のために三の丸の武蔵野御殿と西の丸の中書丸を造った。また千姫には長局と化粧櫓を建てた。

ここで千姫は御姫様と呼ばれ、二十三人の侍女と十六人の下女にかしづかれ、嫁いで二年目には長女勝姫が生まれた。この小姫様には三人の侍女がついたといわれる。翌年、嫡男幸千代にも恵まれて、千姫にとって幸せな月日が流れた。

しかし、それも束の間で、この二年後、あれほど誕生の喜びに浸り、成長を願った幸千代が、わずか三歳で夭折してしまう。

その四年後、寛永三年（一六二六）五月、三十歳の千姫は結婚十年目にして、最愛の夫忠刻まで病で喪つてしまう。そして、六月には姑の熊姫、九月には母お江与の死去という不幸が千姫を襲つたのである。

次々に起る不吉な出来事は秀頼母子の崇りかもしれないなどの風聞にいたたまれず、十一月、千姫は九歳の勝姫を連れて、三度目の江戸へと戻る。そして、髪を短く切り「天樹院」と号して竹橋御殿に居住した。北の丸殿と呼ばれ、七十歳の天寿を全うした。

自由執筆

義勇軍行進曲

森下 征二

何かと話題が多かった北京オリンピックが無事に終わった。日本人選手へのパッシングも懸念された程ではなく、胸を撫で下ろした人も多いだろう。

一方、競技の方は中国選手の活躍が目覚しく、我々日本人も、嫌と言うほど中国国歌を聞かされる嵌めになった。我々はテレビを通し、中国と言う国家と、何時の間にか向き合っていたのである。

ところで、中国の国歌は「義勇軍行進曲」と呼ばれている。それは一体、どのような歌だろうか？ 先ず、歌詞を日本語に訳すことから始めよう。

ナライ
起来（起て）！

奴隷になりたくない人々よ！

我らの血と肉で築こう

新しい長城を！

中華民族最大の危機迫る

一人ひとりが最後まで

雄叫びをあげる時が来た
起来！ 起来！ 起来！

我ら皆が心を一つに

敵の砲火の中を進もう！

砲火をくぐって前へ進もう！

前進！ 前進！ 進！

さすが「義勇軍行進曲」だけに、勇壮で激越なマーチである。中国の国歌は何故、かくも激しく勇壮なのか？ それには、次のような理由がある。

一九三一年（昭和六）。当時、中国では、蒋介石の国民政府と日本軍が激しく対立するなか、毛沢東の共産党政権がそれに絡まり、複雑な情勢が展開されていた。九月、日本軍が満州へ侵入すると、中国人の抗日運動は一挙に高まった。

この時、劇作家であり詩人でもある田漢（ティエン・ハン）は、祖国のために立ち上がった人々を、映画「風雲児女」のなかで描こうとした。彼は国民党の弾圧を受けながら、一九三四年の末から、三五年の初めにかけて、この映画の梗概と主題曲の歌詞を書き上げたが、三五年の二月、遂に、国民党当局に逮捕される所となった。

しかし、幸いなことに、田漢が作詞した「風雲児女」の主題歌の歌詞は、彼の逮捕の直前、同志である若き作曲家、聶耳（ニエ・アール）に渡り、彼の手で秘かに作曲される運びになった。こうして完成したのが、「義勇軍行進曲」である。

さて、「風雲児女」が上映されると、この映画は忽ち、中国の青年の心を掴んだ。特に、その主題歌は救国の情熱を弥が上にも燃え上がらせ、抗日戦線に従軍した兵士の志気を鼓舞することに役立った。それが後に、毛沢東と周恩来から大きく評価され、中華人民共和国が成立すると同時に、「仮の」国歌に定められたのである。一九八二年、華国鋒政権により正式の国歌とされた。こうして定められた国歌が、限りなく勇壮で、非常に激しいリズムであるのも、極めて当然なことだろう。

それはともかく、中国の国歌が抗日運動の歌であることは、我が国でも様々な解釈をもたらした。

その中には、この国歌そのものが、今でも続く中国人の反日感情の源ではないかと、考える向きもあるようだ。穿った考えのようだが、あながち見当違いではないか

もしれない。我々は、中国人が日本人の過去の行為を決して忘れていないことを、改めて確認する必要があるだろう。我々日本人にとって、決して愉快な話ではないが、それが歴史の現実である。両国の間の溝がそんなに浅くないことを、冷静に受け止めるなければならない。

しかし、そうかと言って、その溝が決して埋まらないものかと言うと、そうではない……と思う。何故なら、中国国歌の作詞者と作曲者は二人とも、日本と非常に強い繋がりがあったからである。即ち、作詞の田漢は十八歳の時から六年間、日本に留学して劇作家としてデビューした。作曲した聶耳もまた、ソ連亡命の途上来日し、日本の文化人と交流するさなか、何と、神奈川県藤沢市の鵠沼海岸で溺死した経緯がある。二人の芸術家が、日本から何らかの影響を受けたことは、間違いないことだろう。

自由執筆
内藤家に仕えた数学者
今村知商

はじめに

佐藤 健一

江戸時代、名のある数学者を何名も抱えた藩としては久留米藩が有名である。その時の藩主は有馬頼僊で自身もかなり力のあつた数学者である。数学書も刊行した。『拾機算法』を始めとして多くの著書がある。同じ九州の延岡藩の藩主内藤政樹もまた数学者として知られている。内藤家は徳川譜代の大名であるが、内藤政長の時代の元和八年（一六三二）に上総国佐貫四万五千石から磐城国平七万石の大名として移った。この地を延享四年（一七四七）まで治め、内藤政樹の時代に日向国延岡に転封し、幕末まで続いた。

政長は磐城に入ってから国づくりに取り掛かっていたが、寛永十一年（一六三四）に死去すると長子の忠長が継ぐ。忠長はまもなく忠興と名をかえる。この忠興の時代に今村知商を召抱えた。また、享保十五年（一七三〇）に当時の藩主内藤政樹は久留島義太を、続いて享保十七年に松永良弼を召抱えた。これらのことを記録した資料が「内藤家文書」として現存しており、まだ未整理のものもあるが、いずれにしても四千五百点以上もの資料である。今回は今村知商について述べたい。

今村知商

内藤政長の時代、上総国佐貫であるが、「九鬼水軍」（関ヶ原戦で石田三成に見方の内多くの人を召抱えた。その中に数学の達人な沢村勘兵衛がいた。政長は沢村を郡奉行として小川江筋の工事を担当させた。かなりの功績があったという。内藤家文書によれば、馬の飼育にも秀でていたようである。政長の子の忠興の時代になつても続いていた。

江戸時代は貨幣経済の時代で、人々はそろばんを使って数計算を余儀なくされた。京都を中心としてそろばん塾が出現し、そのなかでも毛利重能の塾は有名で、多くの人が通っていたという。毛利の塾では数学も扱っていたためか、次の世代を担う数学者を輩出している。吉田光由、高原吉種、今村知商は特に有名になつた。この一人今

村知商は寛永十六年(一六三九)に漢文で書いた数学書の『堅亥録』を江戸で弟子のために百部刊行し、翌年の寛永十七年には易しい文で書いた『因帰算歌』を刊行した。『因帰算歌』には日本最初の平板測量も扱われていた。今村の弟子には水戸藩の平賀保秀、会津藩の安藤有益などがあることも武士の間で知られるものになったのだろうか。

内藤忠興が今村の存在を知ったのはこの頃であろう。藩内の街道の整備、河川の工事、田畑の測量、水道、江戸への物資の輸送も重要であったし、磐城から船による海上輸送が困難な地理的な困難を考えると街道や河川の整備は欠かせなかったからである。

今村を家臣にしたかった忠興は江戸幕府の勘定頭である曾根吉次に依頼した。それから間もなく、寛永二十年(この年に正保になる。一六四三)に曾根が仲介となって、今村は内藤忠興に仕えるようになった。

慶安三年(一六五〇)に沢村勘兵衛が追放され、その後承応二年(一六五三)には今村が郡奉行として藩の農政で活躍している。沢村が手掛けた小川江という灌漑用水

を完成させたのは今村の仕事であった。今村が磐城平藩に仕えてから、数学の研究は認められないが、数学で得た知識を事業という応用面に生かしたことは確かである。

自由執筆

水野君への便り

相原 精次

水野君とは私が四十年ほど前、奈良で教員をしていた当時の教え子で、彼は大学卒業後、自宅のある奈良市内で本屋を経営しつつ月一回ミニコミ紙「アゴラ通信」を出していた。既に横浜にもどっていた私に何か書いてくれと連絡があったのが一九九三年の頃だった。ほんのちよつと、と思って引き受けたのが六〇号あたりで、以来一八〇号ほどまで、ほぼ十年間、駄文を送りつづけることになったのだった。

基本的に「鎌倉幕府成立前史―東国からの便り―」というタイトルのもとに、良弁僧正・万葉集・天平文化、等々を語ってきた。どちらかというと古代史がテーマにな

ることが多かったのだが「鎌倉幕府成立前史」と銘打ったのは、一般に承知されている歴史が時代区分という名のもとに分断され、連続する歴史認識が削がれており、それがために事象の背景も、展開した本質も不明なままということが多々あり、その例として「鎌倉幕府」成立の問題があると思えたからだ。この「アゴラ通信」に掲載したものを後にまとめて『鎌倉史の謎』『天平の母・天平の子』などの本となった。

ところで、関東にいてはうつかりしてしまふ情報を、今も水野君がときどき知らせてくれる。今年に入っても一月の中頃新聞に載った京都府南部木津川のほとりの「馬場南遺跡」発掘のことを知らせてくれた。古代寺院の遺跡だが「続日本紀」などに記載のない「神雄寺」と書かれた墨書土器が出土したという。ここは橘諸兄が本拠としていた地域で、すぐにこの人物の名が頭に浮かんだ。そんなことをメールで送ったところ、数日後「橘氏失脚 消された寺？」の見出しのある別の新聞記事を送ってくれた。それらを見ながら、私は彼に、思わず以下のような手紙を書いたのだった。

寒中御見舞

朝日新聞の記事、ありがとうございます。
この記事、私の見ている朝日新聞（東京版）にはなかったもので、大変興味深く読みました。この神雄寺なる寺がもし諸兄にかかわる遺跡であったとすれば、改めて関心が湧いてきます。

橘諸兄。『天平の母・天平の子』でも触れたとおり、左大臣・正一位という身分と位にまでなった人物のことなのに、現在の歴史学の中では語られず、伝記一つない状況であることに對して私は理解できないものを感じ、ここには「日本歴史学界」でのタブーでもあるのか、といった思いを感じ、「橘諸兄」についての諸問題の本質はそんな状況の中にあるな、と思っていました。そのことは『天平の母・天平の子』の中でも多少触れてはいるものの（p一九三～二〇六）、まだ十分煮詰めきれないでいたことでした。でもこのごろ改めて感じ始めたことがあります。

紫香楽・恭仁・難波京、そして平城京への還都。聖武天皇は周辺のおもわくに惑わされて、都うつしを繰り返しました。もし、このことを忌憚なく表現すれば、「奈良の

都」は「平城京」一個所だけではなく、行ったり来たりしつつ、次の長岡京に移っていったことになります。さらにこの長岡京について言えば、奈良時代の終わり七八四年、平安京の始まり七九四年とある空白の十年の中に入りながら放置されたままでいました。そしてなお、そうした状況から抜け切れていないことと合わせて、これは日本史の組み立て、時代区分（年表の柱にあたる）そのものへの疑問点、ということにもなります。来年、平安遷都千三百年を祝おうという奈良市の状況に水を差すつもりではないのですが、「日本史」におけるかなり重要な問題がここには隠れています。

この問題は今度の発掘の「神雄寺」が、『続日本紀』にも書かれていなかった謎、というのとは本質的に違って、明治維新から始まった現在の歴史学界が「わかっていながら目をつぶり、なお、放置したままにいる」問題なのではないかと、思っています。なぜそんなことが言えるのか、その点に対する解答が、近ごろ見えかかってきたように思えます。その見えかかってきた解答とは、橘諸兄の扱われ方という歴史的状況そのものの中にあるのではないかと思わ

れます。

紫香楽・恭仁そして難波と宮を遷した中で、特に「難波京」と諸兄との関係です。

諸兄は元正太上天皇と難波で「難波の皇都宣言」をしています。これは聖武天皇が一方にありながら、元正太上天皇が重祚する、ということであり、このとき二重の都ができたがった瞬間だった、ということになります（『天平の母・天平の子』p一八三・二〇五）。『万葉集』にも諸兄と元正太上天皇とが楽しそうに難波の堀江で船遊びする様子が歌として載っています（『天平の母・天平の子』p一八三）。

再びこのことを忌憚なく表現すれば、中国の唐の時代にもあった複都制、ということとはまったく意味の違う、ほんのわずかな間でも二都分裂の状況が天平十六年（七四四）頃にあったことになります。「奈良時代」は平城京の一都だけでなく、いくつにも分断され、しかもその中には二帝の並ぶ分裂した都さえあり得た、ということにもなりかねない。そして、そうしたことの中心にいた人物が橘諸兄だったのです。

「諸兄の伝記」を書こうとすればこのことを避けて通れないことになり、諸兄を語る

のがタブーとなつてゐる、というのが真相ではないのでしょうか。

さらに広げて言えば、このことが奈良時代と平安時代の接点の時代における「語るのも憚る」ような他の諸問題とも複雑にからんでゐるのではないか、という気がします。私は以前から日本史における時代区分の接点、その推移状況の中で最も語られていない時代がこの「奈良時代と平安時代の境い目」という時代なのではないかと思いつつ現在に至つております。

この中の一つに『万葉集』編纂の問題もあります。橘諸兄と公私の世界で協力し合つた大伴家持、そして諸兄と共に編纂に力を尽くしたこの長大な「歌集」。関東・みちのくとも関係深い大伴家持。そしてこの歌集編纂そのものの謎も、同じ闇とからんだ形で隠されてゐるのではないかと、思つてゐます。『万葉集』は現在、学者の世界では、一部例外はあつても、文学の世界のものとして歴史学の人は史料対象とはしたがりないのですが、この『万葉集』の中に、歴史の謎を解く様々な「鍵」があることを思わないではいられません。

今日はぜひぶん長くメールを書いてしま

いました。ちょっとまとめておきたい思いに駆られてのことでした。ご寛容あれ……。

以上、私信の内容を示すのもどうかと思いつつ、「史遊会通信」の原稿とさせていただくことにした。

【注】橘諸兄が若い頃位階昇進して行く状況の背後に、時の元正女帝の意思が動いていた可能性について、「史遊会通信」合本第5集へ史遊会通信No.100号「元正天皇と橘諸兄」の拙文がある。

事務局だより

※1月の総会で確認された幾つかの事項について報告します。

一、役員の留任

顧問 千坂精一・三戸岡道夫氏（順不同）

運営幹事役割

司 会・森下征二氏

会 計・鍋屋次郎氏

総 括・中込勝則氏

エッセイ集の編集・中山喬央氏

一、エッセイ集の刊行

原稿の締切り 三月末
要項は「史遊会通信」No.169号を参照のこと

一、「史遊」一〇四三号の合本を作る

一、例会日の変更

9月は第五週の水曜日 30日

12月の忘年会は第一週の水曜日 2日

※会員の活動

△中込勝則氏

『調停時報』一七一号へ寄稿

〔四川大地震と「都江堰」・「梁山太公」のこと〕

△千坂精一氏

目黒区社会教育団体「歴史を楽しむ会」

で一月より一年間講師

テーマ「戦国時代を生き抜いた上杉氏」

※新会員の紹介

氏 名 山本鎮雄氏^{やまもとしずお}

生年月日 昭和15年11月

住 所 小金井市梶野町四二一―一五

経 歴 ○四二―二五三―八七四―

広島県立女子大学助教

日本女子大学教授（社会学）

興味あるテーマ

ドイツ社会学・新明正道研究

著書 『社会学的世界』（恒星社厚生閣）

『西ドイツ社会学の研究』（同）

『時評家 新明正道』（時潮社）

『新明正道―綜合社会学の探求』

（東信堂）

今後の計画 雑誌『新明社会学研究』（新

明社会学研究会発行）の継続

祝出版

●瀧澤中著

『幕末志士の「政治力」』

― 国家救済のヒントを探る

祥伝社新書

八〇〇円＋税

●三戸岡道夫著

『歴史遼乱』

栄光出版社

一八〇〇円＋税

平成21年度例会予定

(H.21.1.28)

例会日	演 題	講演者	自由執筆者	✓切
1/28	姫路城と千姫	島津隆子	相原・佐藤・森下・	1/31
2/25	15～16世紀の世界と日本	太田精一	平山・中込・松川・	2/28
3/25	マテオリッチの世界図を中心にして	高橋由貴彦	瀧澤・三戸岡・島津	3/31
4/22		千坂精一	柴田・山本・鯨・	4/30
5/27		松川博光	太田・隆・中山・	5/31
6/24		鯨 游海	高橋・新井・千坂・	6/30
7/22	討論会（テーマは未定）		島津・相原・森下・	7/31
9/30		鍋屋次郎		9/30
10/28		隆 恵		10/31
11/25		森下征二	今年感動した本全員（友の会員も）	11/30
12/ 2	忘年会			12/31